

# ガンダムブレイカー ファクター

アインスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはガンダムブレイカー3を主軸に構成した二次創作作品です。

基本的に最後まで書ききる所存です（・・ω・・）

気に召されなければブラウザバック推奨です（；・▽・）

では今後ともよろしくお願いいたします（土下座）

目次

フェイス0 ”それぞれのプロローグ”

1

## フエイズ0 ”それぞれのプロローグ”

何処までも広がる宇宙空間。

その中をデブリ帯を縦横無尽に飛ぶ赤、青、黄のトリコロールカラーで塗装された人型の機体。

”ガンダム”。

恐らく知らない者はいないだろう。

原点にして最強。

全てのガンダムシリーズの始祖たる存在。

そのガンダムは次々とデブリ帯を越え、現れた敵機に狙いを定める。

だがその飛ぶ姿は、人を魅了する何かがあった。

そして、赤い一つ目の人型の機体……ザクⅡに急接近し、背中のグリップをマニピレーターで掴んだと思えばそれを引き抜き、光る刀身でコックピットにあたる胸部にそれを突き刺す。

しかしただでさやられまいとコックピットを貫かれながらも腰に帯刀した斧……ヒートホークをガンダムの左肩に振り下ろすも、肩関節に到達する前にザクⅡのモノアイから光が消える。

その直後。

特大の歓声とともにアナウンスが響く。

《き、決まったああああ!! 第四回ガンプラバトル世界大会優勝、アラタ シンドウうううう!! 機体はベーシックなもの、卓越したその操縦技術で全てのファイターから優勝をもぎ取ったああああ!!》

『ミスターシンドウ、今のお気持ちを!』

『まあ……何とかなったよ。ここまで来れたのはここで見てる妻と息子のおかげだな』

『べちらんごさまずっ』

『ほら、すぐそこ……おっと、息子が来た』

ドタドタと慌てて走って、”おとうさん”と呼んで父親の元へ。  
父親の元へ辿り着くと、抱き上げられる。

『おとうさん、やったね!』

『おう、お父さんやったぞ。お前のおかげだ、ミナト』

『うん!』

『では息子さんもやってきたところでせっかくなので息子さんにもインタビューしようかな?キミ、お名前は?』

『ミナト!』

『じゃあミナト君、お父さんが優勝したけどどうだい?嬉しい?』

『うん、嬉しいよ!』

『そっかそっか。じゃあ、他に何かあるかな?』

『あるよ。それはね、いつかぼくもつよくなって、いつかおとうさんとたたかってかつんだ!』

『おお、早くも打倒チャンピオン出ました!』

『ハハハ……ミナト、俺は強いぞ?』

『ぜったいかつもん!』

『そうだな、待ってるぞ。ミナト』

『うん!』

『さて、では新チャンピオン!カメラに向かって最高の笑顔を!』

……小さく、それでいて最も輝かしい約束。

だけど、それが果たされる事は、なかった。

ピピピツ、と目覚ましのアラームが鳴り響く。  
のそりと時計のボタンを押し、アラームを止めてゆつくりと起きる。

……あれから十二年。

俺は、高校生になった。

あの日からずっと変わらない夢を俺は見ていた。

「今日は土曜日、か……ゲーセン行くか。ここに引越してからまだ行ってなかったし」

階段を降りてリビングに向かう。

向かった先で、リビングのソファの上で制服のまま寝息を立てているのは俺の母さんだ。

母さんは職業でタクシーの運転手をしているので、夜間走行もあるそう。

昨日はちょうどその日だったみたいだ。

キッチンで軽い朝食を作り、手早く食べていく。

「……ごちそうさま。じゃあ母さん、行ってくる」

「んー、遅くなりすぎないようにー」

「わかった。母さんもお疲れ様」

「ありがとー……おやすみ……」

そして俺は小さなウエストポーチに”相棒”を入れて、玄関の扉を開いた。

さて、始めよう。

俺たちのバトルを。

数日前、彩渡高校にて。

いつもの見慣れた光景の中で、二人の青年が話し込んでいた。

「なあカラスマ、お前ガン普拉バトルとか興味ねえ？」

「や、藪から棒だねカズキ……どうしたの？」

「いやな、ついさつきスゲエの見つけてさ。とりま見てみろよ」  
「う、うん」

カズキがカラスマにスマホを見せる。

画面に映っていたのは十二年前のあのバトル。

「………凄い」

「だろ!? 憧れるよなあ………!」

「………カズキ」

「どうした？」

「僕も、その人みたいになれるかな」

「それはわかんねえよ。でも、メチャクチャ強くなりやなれるんじやねえ?」

「………やるよ。カズキ、僕にガン普拉バトルを教えてください?」  
「任せろ!」

カラスマは決意した表情でそう告げる。

ここに、新たなファイターが誕生した瞬間である。

時間は戻って現在。

ミナトは少し寂れた商店街まで来ていた。

「…………寂れてんなあ」

素直な感想である。

見てみればやっているのはプラモ屋、肉屋、ゲーセン…………あとは居酒屋。

以前まではやっていたのであろう店舗がちらほらと見受けられる。とにもかくにも、ゲーセンが営業しているのはミナトにとっては都合だった。

ここでも、自分の好きな事ができるのだから。

「……か…………意外と色々な筐体が置いてあるな。で、お目当ての筐体は…………あった、これだ」

ミナトが見つけたのは知らない者はいないであろう筐体、ガンπραバトルシミュレーター。

その中へと入り、ポーチからガンπραを取り出す。

「相棒、ここでも頼むな」

その時、キラリとツインアイが煌めいたような気がした。

そして、一通りの準備を終えたミナトは操縦桿に手を伸ばし、握りしめる。



「……真藤 湊人、フアクターガンダム。行きます！」

蒼の機体が、仮初めの戦場へと飛び立つ。

T o b e c o n t i n u e d .